

2 参考 研究協力校の実践事例

実践事例 1 「視野をひろげ、国際社会に生きる道泉の子の育成をめざして」

- Relation Understanding Have a try! -

瀬戸市立道泉小学校

1 学校のプロフィール

本校は昭和元年に開校し、かつて陶磁器産業でにぎわいを見せた、瀬戸の旧市街地を校区にもつ。学校の近くには良質の粘土や珪砂が採れる粘土鉱山もある。児童数は昭和 30 年代には 1,500 人を越えたが今では激減し、現在は 290 名、11 学級で教職員数 18 名の規模である。

ここ数年、瀬戸市全体で新たな学校を目指し、『特色ある学校づくり』に取り組んでいる。本校も英語活動等で特色ある教育活動を推進している。

2 実践研究の経緯・内容・成果

(1) 英語活動への取組の経緯

平成 11 年度に『総合的な学習の時間』試行の一つの取組として、英語活動を 6 年生で始めた。目標を『コミュニケーション能力の育成』においての実践である。

平成 12 年度は活動が各学年に広がり、児童も興味をもち始めた。実践をしていく中で、ALT と英語活動支援ボランティアの協力が得られるならば、学校として組織的に取り組んだ方がよいという方向で意見がまとまり、組織を立ち上げ、計画的に実践できるように準備した。平成 13 年度からはカリキュラムを作成し、1 年生から 6 年生まで英語活動を実践した。

本年度はカリキュラムを見直し、活動内容にも工夫を施し、より充実した活動を目指している。

(2) 英語活動の考え方と実践内容

ア 基本的な考え方

- ・ 言語習得を主な目的とせず、児童の興味・関心・意欲の育成に重点をおく。
- ・ 身近な英語を取り扱い、楽しさの中にも英語に慣れ親しむような工夫をする。
- ・ ネイティブスピーカーと英語活動支援ボランティアの協力を得て、人とのコミュニケーション（触れ合い・かかわり）能力を育成する。

イ 実践内容

- ・ 授業は 1 単位時間 45 分（あいさつタイム・歌タイム・練習タイム・挑戦タイム・ふり返りタイム）で実施し、ALT の派遣日に合わせて計画する。
- ・ 指導は学級担任・ALT・ボランティアの 3 者で行う。ALT が派遣されない場合は担任とボランティアの 2 者で行う場合もある。
- ・ 活動内容は年間計画に基づいて担任が案を作成し、ボランティアの助言や、ALT の意見やアイデアを交えて、案を練り直したもので実践する。

(3) 成果と課題

ア 成果

- ・ 英語活動支援ボランティアの協力により、各担任が安心して取り組んでいる。
- ・ 活動を進めるうちに、外国の人や英語に対して物怖じしなくなり、児童も教師も自信がもてるようになった。

イ 課題

- ・ 教師の力量向上を目指す必要がある。（現職教育で授業研究等を実施）

- ・ 評価はどうあるべきか。
- ・ 中学校の英語学習との関連はどうするべきか。

実践事例2 「豊かな言語活動を楽しみ、主体的に学ぶ子の育成」

小牧市立小牧原小学校

1 学校のプロフィール

小牧市は、名古屋市の北部に位置し、名古屋市のベッドタウンとして発展してきた。人口約 15 万人の市である。本校は、小牧市のほぼ中央にあり、本年度で開校 27 年目を迎える。1 年生から 6 年生各 3 学級と特殊学級 2 学級の 20 学級規模の学校である。他に外国人児童が 10 人以上いるため、国際理解学級も設置されている。

2 実践研究の経緯・内容・成果

(1) 英語活動への取組の経緯

平成 12 年度から英語活動に取り組むことになった。本校の英語活動は、国際理解の一環としてではなく、英語活動そのものを研究することであった。平成 11 年度の後半で英語活動のカリキュラムを検討し、1 年生から 6 年生までの活動内容を考えた。年間活動に沿って進めてきたが、随時改訂を重ねてきた。平成 12 年度 2 月には、発表会を行った。

(2) 内容

ア 組織・時間設定

英語活動部と学習資料部の 2 つの部に分け、英語活動部では、活動の在り方について研究し、そのために必要となる教材の開発については学習資料部が担当するというようにした。主体的に活動できる子の育成を目指し、話し合い活動や体験活動、グループによる活動、表現活動などを重視してきた。

年間指導回数を 35 回とし、各学年とも週 1 回の活動時間を確保した。1 年生と 2 年生は 15 分間の活動とし、3 年生以上は、45 分間の活動とした。火曜日から金曜日の朝の 5 分間、歌やリズムチャンツを全校で取り組んでいる。単語や簡単な会話、文字の発音の練習を中心に進めている。

イ 研究の方法

指導の形態

T T 形式をとり、活動の進行は担任が主になって行ってきた。英語担当の他に平成 12 年度は、3 名であったが、平成 14 年度は 5 名の協力員の応援で活動を行っている。平成 11 年度から平成 13 年度までは月 1 回の A L T による活動であったが、平成 14 年度は、ほぼ月 2 回の活動が行われている。

活動の流れ

始めのあいさつ 単語の練習（リズムチャンツ） スキット 会話の練習 ゲーム 英語の歌
児童の感想（その時間にがんばっていた子の発表など） 終わりのあいさつ

活動の流れを上記のように設定したが、内容によって変更をしている。

教員研修

平成 13 年度までは、水曜日の午後に毎週 1 回研修をした。内容は、朝のリズムチャンツを練習したり、歌を歌ったり、A L T にクラスルームイングリッシュを教えてもらったりといったものである。

(3) 成果と課題

成果としては、英語活動を低学年から始めることの重要性が分かったことや、児童に、外国の人と物怖じしないで話そうとする態度が芽生えたこと、教師側も英語に対する不安感が和らいできたこと

があげられる。課題としては、内容をどのように充実させていくか、また中学校との連携をどう進めていくかということがあげられる。

実践事例3 「英語活動を楽しむ子の育成」

- 町教育委員会との連携を通して -

田原町立野田小学校

1 学校のプロフィール

本校は、各学年2学級の12学級規模の学校である。本校のある田原町野田地区は、以前は農村地帯だったが、新興住宅地ができ、そこから通う児童が3分の1を占めるようになってきた。本年度は、児童数307名、教職員数20名である。

2 実践研究の経緯・内容・成果

(1) 経緯

田原町では、国際化時代に向けてアメリカ・ジョージタウン市と姉妹都市提携を結んで人的・文化的な交流を推進している。このような流れと地域の実情を踏まえ、小学校へ「英語活動」を導入した。それは、外国人と触れ合いながら、英会話に触れたり外国文化に慣れ親しんだりする機会を設けて、児童の国際感覚を養い、未来社会を担う人づくりに、より一層努めたいと考えるからである。あえて「英語活動」と銘打ったのは、歌やゲーム、簡単なあいさつなど体験的な活動を中心に、英語に慣れ親しみ、楽しむ活動が展開されることを願ったことである。

(2) 内容

ア 活動目標

英語に触れる活動を通して、英語の音に慣れ親しみ、積極的に外国人とかかわろうとする態度を育てるとともに、外国の文化や習慣などへの興味・関心を高め国際理解の基礎を培う。

イ 基本方針

児童と教師が楽しめる活動

「聞くこと・話すこと」を基本とする活動

外国人と触れ合う活動

いつでも、だれでも、どの学校でも取り組める活動

楽しさを大切に、児童に評価されていることを意識させない活動

ウ 指導形態と時間の確保

指導形態は、外国人との触れ合いを第一義とし、学級担任とALTによるチーム・ティーチングとする。英語活動は、1学級月1回程度（年間7～10時間）実施する。

エ 確認事項

授業の打合せ、送り迎え、その他ALTに対して行うことを、町のすべての学校で確認する。

オ 活動の展開と記録の累積

毎回、英語活動の記録を累積し、年度末に活動案を町教育委員会に提出する。その活動案をもとに、各学年に応じたマニュアル本「Let's Enjoy English Activity」を発行する。

(3) 成果

ア 歌やゲームを取り入れた活動なので、楽しく取り組むことができる。

イ ALTが楽しく取り組めるように工夫してくれるため、児童の取組がよい。

ウ 発音が良くなった。